

# 1051年の昔、思いは平安朝に



平安の歌人紀貫之をしのび、約100人が集まり開かれた  
「土佐日記門出のまつり」

## 「土佐日記門出のまつり」

貫之しのび……

約100人が集う

平安の歌人紀貫之の門出をしのび「土佐日記門出のまつり」が一月三十日、研究者や歌人など約百人が集まり、比江の紀氏邸跡で開

比江  
紀氏邸跡

かれました。

昨年が貫之の門出五十年にあたり、それを記念し、国府史跡保存会（乾常美会長）が始めたもので、今年は南国史談会と市観光協会も協賛。茶席の接待や土佐日記ゆかりの絵も展示するなど、二年めを迎え「まつり」も盛り上がりしてきました。

紀貫之が、土佐の国司として京都から来任したのが延長八年（九三〇）一月。土佐守の四年の任期を務め終え、承平四年（九三四）十二月二十一日に国司館を出発。そして約二カ月におよぶ舟旅の末、翌年二月に京都に帰着するその間の見聞や感慨を記したのが、有名な「土佐日記」。

それによると「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。その年の十二月の二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す」とあり、比江の国司館を出たのが旧暦十二月二十一日で、今年は一月三十日に当たります。



土佐日記ゆかりの品も展示され、参加者は興味深く観賞

祭典は、寛政のころ建てられた

と言われる紀氏旧跡碑の前で、永源寺の鳥崎利昭住持による法要が行われ、出席者が献花。乾会長が「歌人紀貫之が、この比江の地に四年あまりもおつてくれたことはうれしいことだ。土佐を離れるときは、多くの人と別れを惜しんだことと思う。この日を節目として、さらに史跡の勉強、保存にも努め、まつりの灯が消えないよう続けたい」とあいさつ。

その後、会場を国府地区公民館に移し懇話会。公民館二階には、今回初めて「絵で見る土佐日記」と題して、ゆかりの品を展示。故大野麗夫画伯が揮毫した襖絵と軸、「土佐日記」に現われる各地風景画をはった屏風など十点が展示され、参加者は興味深く鑑賞し

ていました。

懇話会では、保存会の婦人会員の手作りの料理が並べられ、「土佐日記」の研究者として知られる竹村義一前高知女子大教授、岡林清水高知大学教授らが「比江の地は、何度見てもすばらしい景色であり、貫之が土佐に来たときとあまり変わっていないと思う。この風景をいつまでも残してほしい」「土佐日記は一つの季節感を持った文学であり、旧暦にしたがったこのまつりの着想はすばらしいと思う。貫之は、国分川の清らかな流れを見、また泳いだかも知れない。今日は、この美しい自然の中で貫之をしのびたい」と、ゆかりの言葉述べ、参加者も平安の昔に思いをはせていました。